
十年後の夏

小仁沢 為絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十年後の夏

【Nコード】

N3093Z

【作者名】

小仁沢 為絵

【あらすじ】

月×日

空からノートが降ってきた。

月×日 晴れ

今日、空からノートが降ってきた。

と言っても、そのノートに名前を書くとか人が死ぬとかいう物騒なものではない。

それはA4サイズのノート。ひまわりの写真がプリントされ、タイトルは『絵日記』となっていた。

誰かの日記帳かと思ったら、表紙の氏名欄には汚い字で『1年1組よろずやきよーだい』と書きこまれていた。

それを見て思い出した。昔々……俺らが小学1年の夏休み、宿題に絵日記が出されただろ？

その時、確か伊吹が、

「毎日日記なんて書けないよ。何書いていいかわかんないんだもん」
なんて泣き言みたいな文句を言ったんだよな。

それに俺らは賛同して、誰かが、誰だったのかまでは覚えていないが、「五人で交換日記をやるっ」って言いだした。

何をするにも五人とも一緒なんだから、日記に書く内容も五人とも被るに決まってる、だったら同じ内容の日記を五冊書くより、五

人一日交代で一冊の日記を書くほうが、俺たちも、夏休み明けに宿題をチェックする先生もいいに決まってるって。

「画期的な提案だと思ったんだけど、結局先生にも母さんにも怒られたんだよな。」

懐かしくなつて中を見てみたら、改めて納得した。

夏休み中は何をするにも基本的に五人で一緒に行動していたのにも関わらず、何故か内容は五人ともてんでばらばらなことを書いていたんだから、あれじゃあ確かに先生も怒るわけだ。

そう、例えば……俺の場合なら未来日記。

と言つても、そんなたいそうな内容じゃない。明日の天気とか近いうちに起こりそうなこととか、自分でこうだったらいいな、って思うことをつらつらと記してただけ。もはや日記じゃない。

蓮花は近所に住んでたカッコいい高校生のお兄さんのこととか、よく見掛けるイケメン郵便配達員のこととか、男に関することばかり。ある種の観察日記みたいなもの。

豹雅はまともな日記らしく、一日の出来事を書いてた。

でもその内容は痛々しくて、ある時は石につまづいて転び、ある時は野良猫にひっかかれ、ある時は近所の凶犬に追い回され、ある時は樹里と伊吹の喧嘩に巻き込まれ……あいつが日記を書く日はいつでも騒がしくて、その騒ぎに豹雅はいつも巻き込まれてた。まったく不憫な奴。

そんな豹雅と対象的なのは樹里。絵と文で一ページを埋めようと一生懸命な豹雅に対し、樹里は決まって二行しか書いてなかった。

『今日も皆で遊んで楽しかった。以上』。

小学校一年生の女の子にしては冷めてるといっつか、ある意味男らしいといっつか。

樹里の性格からするにただ単純にめんどくさかっただけかもな。

なんだかんだで一番やる気があったのは伊吹だったかな。

食いしん坊らしく、その日の朝食・昼食・三時のおやつに夕飯、何が美味しかったか、どれほど美味しかったか、事細かに記していたよ。

その意欲を勉強にも発揮できればいいのに。

こつやってみると、俺たちは同じ兄弟で、いつも一緒にいるのが当たり前だったけど、あの頃から見ているもの、興味の対象が全然違ったんだな。

きつと今やったら、あの頃とはまた違った個性が見えるんだろう。

俺に出来て、蓮花には出来ない。

蓮花に出来て、豹雅には出来ない。

豹雅に出来て、樹里には出来ない。

樹里に出来て、伊吹には出来ない。

伊吹に出来て、俺には出来ない。

気付いてないだけで、きっとそういうものがあるんだろうな。

一通り日記を読んでから、俺は家へ戻った。

きっと母さんが二階の押し入れの片付けでもしていて、間違っ
て窓から落としてしまったんだろう、そう思って。

ところが母さんは押し入れの片付けなんかしていなかった。

俺たちの部屋で、いつまでも起きようとしないう伊吹の布団をひ
ぺがすのに夢中になっていた。

もちろん、絵日記を見せて、空からノートが降ってきたことを説
明をしたが、母さんは何も知らない、不思議そうに首を傾げなが
ら言った。

伊吹は寝ていたし、豹雅は出掛けていた。

蓮花と樹里は一階の居間でテレビを見ていたし、いったい誰があ
の絵日記を落としたのか。

いや、よくよく考えたら、家の裏側に面する二階の窓から、庭先
にノートを落とせるわけがない。

あのノートは本当に空から降ってきたのだろうか。

真相はわからない。だけど、一つだけわかったことがある。

あのノートは見つかるべくして見つかったんだということ。

その証に、ノートの一番最後のページ、夏休み最後の日の日記は俺の言葉で締め括られていた。

『夏休みが終わり、交換日記も終わってしまいました。』

僕はすごく楽しかったし、みんなも楽しかったと思います。

だけど楽しいことはいっぱいあるから、きっと交換日記のことを、僕らは忘れちゃうんだろうと思います。

それならそれで、忘れちゃうのは仕方ないから、例えば十年後、僕らが今よりもっとずっと大きくなったら、このノートを見て、みんなで楽しかったねって笑って、大きくなったみんなと、また交換日記をやりたいです。』

つまり、そうゆうことらしい。

これが当時の俺が書いていた未来日記の集大成なのか、ただの偶然なのかはよくわからない。

どっちにしる、あれから十年、十七歳の夏休み初日にこのノートを見つけたからには、日記を書かないわけにはいかないだろう？

そんなわけで、俺は今、これを書いている。

午前2時42分。

隣の部屋からドツタンボタン賑やかな音が聞こえる、きつと寝相の悪い樹里がまた壁にぶち当たっているんだろ。

こちらでは豹雅も伊吹も大人しく寝ているっていうのに。

これを書いたら俺も寝ることにしよう。

明日……もう今日か。朝になったらこのノートをまず、蓮花に渡そう。

強制はしないが、七歳の俺が見た、ささやかな夢に付き合ってもらえると、とても嬉しく思うのだが。

如何だろうか。

7

「というわけだ」

「ちなみに夏休み交換日記の言い出しっぺはハツだよ」

「そうだったか？」

「俺はやりたい交換日記！ あれけっこう楽しかったんでよねー。学校別れてからお互いになにしてんだかイマイチよくわかんなくなっちゃったしさー」

「私も是非参加したいわ」

「僕もいいよ。ジュリは？」

「本当はめんどいからやりたくないけど、皆がやるってんなら付き合おう」

「タイトルはどうする？」

「シンプルに『交換日記』でいいんじゃないかしら？」

「面白味にかけない？」

「ノートのタイトルに面白味を求めなくていいじゃない。誰に見せるわけでもないんだから」

「んじゃ『今日の出来事』は？」

「交換日記は必ずしも『今日』あったことを記すものではないぞ」

「あら、いいじゃない。そこまでこだわらなくても。書くことに意味があるんだから。今日あったこと、今日思ったこと、今日見た夢のこと、今日思い出した昔のこと……」

「つまり何でもありってことなんだね」

「まっ交換日記なんてそんなもんでしょ」

「毎日書かなきゃいけないの？」

「いや、みんなそれぞれ都合があるだろうから好きな時に書けばいい」

いよ。俺は五人で楽しく交換日記が出来ればそれでいいんだ」

「交換日記なんて久しぶりだわ」

「女の子は好きだよ、そーゆーの」

「あたしは嫌いだった。めんどくさくて、途中で嫌になるのよね」

「いいねーこーゆーの、仲良し兄弟って感じ」

「まあ、途中で飽きるかもしれないけど……とりあえずノート一冊分は頑張ろうな。ご協力よろしく」

「「「「はい「「「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3093z/>

十年後の夏

2011年12月10日21時50分発行